

文化芸術による復興推進員（宮城県）

第2回連絡会議 要旨

日時：2月6日（水曜日）
13:30～16:30

場所：気仙沼市民会館 第1・2会議室

出席者

（宮城県推進員） 赤坂茂夫（宮城県民会館）
大澤隆夫（（一財）音楽の力による復興センター・東北）
斉藤洋介（サウンドラボ音楽教室）
白津守康（（公社）落語芸術協会 仙台事務所）
鈴木拓（ARC>T）
（助言者） 渡辺一雄（文化芸術による復興推進コンソーシアム）
（運営委員） 小松弥生（全国美術館会議）
半田昌之（（財）日本博物館協会）
松本辰明（（社）全国公立文化施設協会）
本杉省三（日本大学）
渡辺聡（（一社）日本音楽著作権協会）
（全国組織推進員） 小岩秀太郎（（公社）全日本郷土芸能協会）
（気仙沼市） 千葉光広（気仙沼市教育委員会生涯学習課長）
千葉絢子（気仙沼市教育委員会生涯学習課文化振興係）
（オブザーバー） 秋元庸生（（一社）日本音楽著作権協会）
（文化庁） 土屋啓一（文化庁文化活動振興室）
（事務局） 大和滋・松野幹夫・伊藤美歩

開会の挨拶

1. 出席者紹介

2. 第1回復興推進員連絡会議から出た課題について 渡辺一雄アドバイザー

「第1回連絡会議において提起された課題の整理等について」参考メモを基に説明。配布資料には、○が岩手県、◎が宮城県、●が福島県の会議で発言されたものとされ、今日の議事、議題が効率的に進むようにアドバイザーにより分類されたものである。

・地域社会の復興

（1）行政施策に関するもの（2）被災者の生活の充実に関するもの（3）芸術鑑賞、祭りなど享受の機会に関するもの（4）地方自治体同士、企業との相互支援・連携に関するもの
上記の中から4つに細分類できる。

・芸術文化活動の在り方

（1）芸術団体等による支援活動（2）市民による芸術文化活動（3）民俗芸能の保存、継承、記録保存

上記の中から3つに細分類できる。

・文化施設に関するもの

・各自の活動分野により多様な内容であり、整理する上で「何を基準とするか」が困難であ

り、「復興推進における芸術文化の役割等」という共通のテーマを議論する上では、いくつかの基本的事項について共通理解が必要である。

・また、課題としては、以下の4つが挙げられる。

- ①震災以前からの課題が、被災を契機に顕在化したもの
- ②未曾有の規模の被災状況から、人間社会・文化の根本的在り様に問いかけるもの
- ③短期、中期、長期の時間軸で仕分けて検討すべきもの
- ④Feasibility（実現可能性）を基準に吟味すべきもの

上記が混然となっている→ 議論がかみ合うための前提事項が何か探る必要がある。

3. 被災地自治体の復興計画等に記載された文化芸術の復興に関する内容および協議

大和

・昨日の岩手県の推進員連絡会議では、復興計画の中に文化が位置づけられるようにしたという報告や、記載がなくても文化の活動を行っているといった意見があった。また、ハードの復旧が中心になっていることへの指摘も出された。自分の自治体の復興計画については、どの程度、認知していたか。

鈴木

・一度読んだが、読み込んでいない。地元のアーティストや、市民の方々が関われるように記載されていない。

斎藤

・活動場所などが少なく、河北新報社が文化活動で使用できるように気仙沼市にビルを譲渡したという話は聞いたが、全体的に行政の動きを把握しているわけではない。

大和

・復興計画は余り知れておらず、問題意識として民間の活動が伝わっていないと捉えているようだ。県の立場からはどうか。

赤坂

・以前、地域防災計画に携わっていた経緯がある。教育委員会や主な関係機関と協議し、消防防災課として、震災対策編に新たに津波対策編を書き加えたことを思い出す。
・宮城県の復興計画では、「芸術文化のかおり高い地域づくりの推進」という一文が、よくぞ加わってくれたと感じた。今後、文化の継承、保全のほか、県民の目線にたった細かい展開をしてくれることを望む。

大和

・岩手の会議では、ソフト面と並行して生活再建で施設が復旧していくと同時に、文化活動もいかに復興していくかについての明確な位置づけが必要だとの意見が出された。
・今回の調査研究会では、1章立てて、復興計画の中で文化がどう位置づけられているかということを押さえて、問題提起をしていこうと考えている。
・気仙沼市の場合はどうだったのか。

千葉（光）

・復興計画については、各項目別に計画を進めたため、条例などを基にということではない。
・震災の復興計画は、災害防災計画とはまた別な形で作っている。今回の震災から復興す

るための計画として新たに作成したものが震災復興計画という位置づけだ。

大和

- ・調査研究会では、阪神淡路大震災の教訓として、兵庫県も復興計画の中に「文化」を記載した。それが根拠となって10年後に芸術センターが復興のシンボルという位置づけで建設されてきた経緯がある。何らかの形で議論の中に、行政的な位置づけを入れることが重要であり、どのように入れていくかを1つのテーマとして検討し、皆様のご意見を伺いたい。

半田

- ・これまでの話から「復旧」とは法的な枠組みの中で原状復帰していく道筋であり、「復興」とは、1つのビジョンが必要となってくるプランであることがわかった。
- ・「防災計画」や「復興計画」の中では、復興は語りきれないテーマだろうと考える。それを無理に法律から条例へ、そして実施としても、マネジメントに無理が出てくると感じる。
- ・私は、博物館という立場で、このコンソーシアムと関わっているが、統括しているマネジメントの部分が、横との連携が取れていないというイメージを持たざるを得ない。例えば午前中にリアス・アーク美術館を視察してきたが、そこでは復興の過程にあるデータや写真などを集めており、コンソーシアムでもテーマとして挙がっているアーカイブやレスキューと共通している部分もある。しかし、学芸員は、このコンソーシアムの存在自体を知らなかった。
- ・全国美術館会議と日本博物館協会も救援委員会という組織で関わっているが、このコンソーシアムの中で、救援委員会に対してターゲットにしている活動とは、底辺では既に横串が刺さっているのに、縦で見ると繋がっていない。
- ・国から下りてくる復興についての政策が動きづらくなっているのは、今の話を聞いても、条例やその上の法律との関連が、委員になっていらっしゃる方でもクリアになっていない中で、ご自身の立場や専門の分野での思いの丈を話されると、結局、バラバラ感が出る原因となると感じる。

白津

- ・復興計画の経緯は新聞で見える程度で、文化の部分に関しては、自分として漠然としている部分もあり、周りに聞くことも出来ない状況である。

大和

- ・民間の推進員の方からは、復興計画の認識が薄いようだが、コンソーシアムの役割として制度論についても述べた方が良いという意見もあり、何らかの形で、復興計画の内容を分析して、問題を提起し、推進員の皆さんにも認識していただければと思っている。

渡辺（一）

- ・1回目の復興推進員連絡会議では活動の状況や課題をご報告いただいた。今回の2回目の会議を通して、25年度以降のコンソーシアムの方向性や考え方の取りまとめを引き出したい。しかし、皆様の意見を生かせる体系立ったものにはなり得ていない。別に無理にきちんと整然たるものにする必要はないが、少なくとも何がわかっている、何がわかっているのか。あるいは、コンソーシアムとして被災地に対して役に立てるという方向性についての議論をかみ合わせるためには、どのようにすればいいかというところまで細かく、議

論しなければならない状況だ。

4. 文化芸術による復興推進活動としてふさわしい事例についての意見交換

大和

- ・調査研究報告書では、皆様からの活動の事例報告をまとめていきたい。よい事例があれば教えてほしい。

《事務局資料の事例の説明》

鈴木

- ・南三陸の「きりこのプロジェクト」などは、非常に良いと思う。理由は、日常に入って対応することが重要という意味で、アートという文脈で始まっていないからだ。
- ・アーティストの立場から述べると、プロジェクト名がつくような活動ばかりではなく、日常の中で行われる小さな出来事が沢山あり、それを事業ベースでまとめて報告できるかという、非常に難しい。
- ・ARC>Tに登録している人の150人分のまとめを今日ここでしゃべること自体が非常に難しく、なかなか論理的にはいかない。先ほどの復興計画の話でも、アーティストやアートプログラムを享受している人に、見解を求めても難しく、できればヒアリングにしてほしい。
- ・コンソーシアムの事務局を地元においてほしい。そうすれば、現場を取り仕切りながら、言語化することの難しさと、人手や資金不足等についても、より分かってもらえるだろう。

大和

- ・コンソーシアムは地元にあったほうが良いという声があるが、議論だけは既にしており、痛切に感じている。

渡辺（一）

- ・アーティストはなかなか理論的にいかないという部分を踏まえ、歩み寄りの方法を考えるべく、他の方にも距離を埋める術等を伺いたい。

白津

- ・ソフト面に対して事業予算がある場合、行政側や会館側から、どのように出来るのかをアーティスト側から提案してくれと言われてしまうことが多い。出せる人は決まっているため、片寄りができる。その辺りを何かコンソーシアムでフォローしてくれたら良いと思う。
- ・3月1日に東北大学の萩ホールで朗読劇を行うが、こうやったらというアイデアを、コンソーシアムを通じて様々な人と協議できれば良いと思う。

斉藤

- ・練習や話し合いを行える場所の確保が難しい。市役所の方がいらしているので、河北新報社が自社ビルを気仙沼市に譲渡されたというお話は、どうなっているのか伺いたい。

千葉（絢）

- ・現在は、気仙沼市に移管されており、近いうちに仮の中央公民館として活用する。その中で、前の中央公民館にあったようなホール機能や市民の表現活動ができるような場所を確保する話が進んでいる。ただし、あくまでも仮の中央公民館なので、中央公民館を別に再建して、従来活動してきたようなホール等を改めて作る計画になっている。

- ・また、市役所付近に、主に子どもたちが表現活動を行えるような場をつくることを計画している。具体的な時期については、調整中で現在は言えない。

赤坂

- ・震災直後は、多くの人が文化芸術という雰囲気ではなかった。震災の年の4月以降に私は会館の職員となり、避難所の訪問等を行う中で文化芸術の重要性を感じ、今後の震災に備え、コンソーシアムで話し合ったことなどが役に立つのではないかと考えている。
- ・被災県の会館として、どのような支援を行うべきかというアドバイスは、大変有難い。復興計画の中にもソフト面の大切さを入れていくべきだと思う。
- ・本来ならば自主事業などを我々の力で出来れば良いが、なかなか自分たちだけの力では復興支援に役立つ事業のアイデア・実行などが上手くいかない。何かノウハウがあれば、アドバイス頂きたい。
- ・復興推進活動の参考事例としては、我々の事業の基本方針として「アートの力で 夢を！希望を！」というフレーズを掲げ、昨年度に引き続き事業を推進している。
- ・事例としては、新たに興した被災者を公演に招待する復興支援事業や、以前から実施している地域の公立文化施設と共催で資金面等から支援を行い地域で開催する地域鑑賞事業等がある。特にこの地域鑑賞事業が、県と市や別の市をまたいだ取組であり、地域の公演事業の開催を通して、地域の賑わいなども支援するもので1つ事例と考えている。

大和

- ・赤坂さんがおっしゃった、県レベルの取組、県がうまく市町村と連携をとり、県として何をやっていくか、県の会館や事業団がどういうことをしていくかを1つの事例として挙げたいと思う。

大澤

- ・学校の校歌のCD化を計画している。閉校となる21校の小中学校の校歌をCD化しようとオーケストラ連盟と連携し行っている。
- ・東北は、被災した地域が広く、それぞれの行き来が困難なため、中継地点が必要であり、全体の仕事の進め方について、お話し合いができれば良いと考えている。
- ・各支援組織が法人化している中で、コーディネーターが圧倒的に不足している。今後コーディネーターを育成することも必要である。
- ・また、支援を受け止める側の力も重要である。
- ・つまり、中継組織があつて、たくさんのコーディネーターがいて、ネットワークがあつて、といった、分野に関するマーケット（流通するシステム）を、早急に考えていくべきである。さまざまな活動をするためには、当然、イニシャルコスト（設備投資）も必要であり、コスト面も含めての震災対応型のマーケットが出来ればよいと考えており、その中で私はコーディネーターとして、様々な所のくっつけ役を行っていききたい。

小岩

- ・民俗芸能には、地域それぞれのアイデンティティーやコミュニティがあり、1個にまとめあげることは非常に難しい。コンソーシアムとして、それぞれの声を自治体や国に繋いでいけるような組織になってほしいと思う。
- ・地域の人たちが活動するモチベーションを高めるための、発信をコンソーシアムに担って

ほしいと感じており、情報がどこにあるか、わからないというところもあるため、そこを共有する場になれば良いと感じる。

大和

- ・今回の被災地域の民俗芸能の様々な取組の中で、全国にも参考になるというような取組はあるか。

小岩

- ・石巻市は、民俗芸能の連絡協議会をつくり、復興に向けての段階を記録している。
- ・女川は獅子舞が非常に有名で、地域の中で若者たちが競い合って、次の担い手をつくっている。多分、来年度ぐらいには獅子舞という括りで復活祭のような形が見えてくるのではないかと注目している。

千葉（絢）

- ・気仙沼市でも民俗芸能団体は、用具の流出など津波で大分被害を受けた。市として行政的に民俗芸能に支援が出来なかったので、支援財団のご支援を受けられるように、情報を提供し、一般の方が作成するのが難しい書類作成のお手伝いを行った。
- ・県の教育委員会とタイアップしながら、震災前から記録保存の取組を続けており、伝統が途切れてしまわないように、記録を残しつつ、用具を整理しつつ、地域の再生を図る取組を進めている。

小松

- ・全国美術館会議は、文化財レスキューに参加した。そのような仕組みのある分野はそれに頼ればいいが、仕組みのない分野で、自分たちはこんなことが出来るけれども、どうしていいかわからない。そのような人たちと被災地とをうまく結びつける仕組みをつくるのがコンソーシアムではないかと思っている。
- ・グッドプラクティスは確かに参考になるが、これが足りなかったといった反省点を含む事例も出していただくと、それに対する解決策に繋がっていくと思う。また、日常の小さなことの中にもいろいろな知恵があり、そういう小さなエピソードもうまく拾って、情報収集、発信が出来ると良い。
- ・従来の枠組みの中におさまるものと、そうではないものがある。例えば、きょう事例で紹介いただいた、CDをつくるというのは、ある意味、ビジネスに繋がっていくことかも知れないし、そのようなものをどうやって創り出していくかということが1つ問題として出てきていると感じた。

本杉

- ・違う自治体同士の連携というものがもっていないのかなと思っていたので、協力し合う「地域鑑賞事業」というのは、これからの文化活動を考える上で、可能性があるし、日常的にも広められよいのではないかと思った。
- ・コーディネートという観点からも、人と人、人と施設、施設と施設、活動と活動をつないでいく人というのが、これまでの文化支援活動の中でも、あちこちにいたと思う。その人たちが持っているネットワークの中で、特徴的な人たちがいたら、そういう事例・人を拾い上げていくこともよい。その中でコンソーシアムがどういう支援の仕方を提供できるのか、その辺の可能性を考えなければいけない。

渡辺（聡）

- ・岩手の会議も今日の議論も、復興計画の中にどう盛り込んで、行政の中でどう生かせるかと、なかなかアイデアはないが、コンソーシアムの調査研究の中でそういうものを紹介し、補完的に使われていくようなことができればいいのではないかと感じた。
- ・私達は音楽の創作者の団体で、震災以降、中長期的に、音楽の力でできることがあるかという視点で考えている。具体的には、会員の作詞家や作曲家が、自分の曲を復興の役に立ててほしいと発生する使用料を寄附している。その寄付を、これからどういったものに使っていきけるかということを考えていく上で、具体的に被災地の学校とコンサートを行って、あわせて演奏家のコンサートに来ていただくといったことをやっている。そういう形を継続するのか、変えていくのか、自主的な事業の展開も考えている。

半田

- ・印象に残ったことは、日常の中で起こっている様々な文化的な「出来事」の部分が、本当は一番大事なところなのだという事。文化芸術は、人々の暮らしや生きていく中で、必要不可欠なものなのであり、なぜ生きるために必要なのかというエビデンス（根拠）が大事であろうと考える。
- ・時間の経過と共に、どういう動きが起こっているのかというデータを、1つ1つ悉皆調査的に把握して、これだけ多くの日常不可欠なことが起こっているという事実が、何にもまして文化や芸術が必要なのだということを訴えていく非常に大きな力になると思った。これを客観的なデータとして示していけるようなデータベースをつくるため、間にコーディネーターという機能は必要かもしれないが、現地からそういったデータを持ち出し出来る仕組みについてはどのようにしたらよいのだろうか。
- ・気仙沼市の書類づくりを手伝っているといった報告は、こういうところをどこかが担うと、もっともっとスムーズに裾野が広がっていくと感じた。
- ・日常生活の中の郷土芸能やアート活動が、その地域の人々にとっては文化財であるということデータをもって示せるようなお手伝いをするのも一つの大きな役割ではないか。

大澤

- ・我々は、これまで行ってきた活動の記録フォーマットを作成している。いつ、どこで、誰が何を誰の費用で、コーディネーターが誰でというのをアーカイブ化し、今後は、被災地に入りたい人等が自由に検索できるようにしていきたい。
- ・校歌のCD化というのも、記憶装置としての音楽ということになるので、記憶ミュージアムという括りの中で、最終的にアーカイブではなくて文化芸術が記憶の有力な手段になっていくのではないか。

白津

- ・私の団体は言葉を扱っており、語り部を通して言葉が各地に物語を作っていく。津波や震災を体験した人が、ローテーションを組んでミュージアムの一角を借りて、何か催しのようなものが出来ると非常に良いと思う。そのような中でコーディネーターが生まれることや、そのようなイベントが観光に結びついていくことは、十分にあり得ると思う。

鈴木

- ・アーティスト側の思いも言葉を拾っていただけるということは結構勇気づけられる。しか

し、コンソーシアムは説明しづらくて、どう言ったらいいかわからない部分もある。

斉藤

- ・震災で繋がったアーティストや ZeroOne 瓦礫再生楽器プロジェクトと共に、サウンドラボの音楽教室を使い、被災地向けの心の復興イベントをこれから開催する。また、宮城県内の民間のテレビ局で「わせねでやプロジェクト」というのがあり、文化活動が行われている事例として、是非取り上げてほしい。

赤坂

- ・やはり何を考えてやっていくのかという視点が大事であり、被災者支援という観点から、住み慣れた地域を離れて、別な地域で家を建てる人にまで、どういうふうに我々が関わっていけるのかという考えも必要だと思う。
- ・首都圏との差は人的、財政的にも多大にあり、我々の会館のニーズが少なくならないように疲弊した中でも力をつけていく方法を考えなくてはならない。

5. 協議のまとめとコンソーシアムの今後のあり方について

渡辺（一）

- ・コンソーシアムの役割、組織、活動の中身が十分掴めず、受けた推進員の方々がそれをどう周知していったらいいか手がかりがないということが挙げられた。もっとコンソーシアムの実像が見えるように改善してほしいという要望が出ていた。
- ・コンソーシアムには被災地を超えた、あるいは被災しなかった地域、将来の震災の可能性のある地域といった全国的なレベルで、しっかりとある種の方向性を持った観点から、1つの提案をされる必要があるのではないかとこの点も挙げられていた。

土屋

- ・コーディネーターや被災3県につなぐ役割の事務局を置けないかという点については、来年度、コンソーシアム事業の中で地道にやってほしいと考えている。
- ・ただし、予算の面で事務局そのものを被災地に置くことは難しい面もあり、まだ検討中ではあるが、復興推進員の皆様に情報の収集等の多大なご協力をお願いすることは、あるかも知れない。

松本

- ・コンソーシアムとして今後アクションを起こしていかなくてはならないと思う。皆さんからも指摘されていたが、コンソーシアムが中に入って何かつながったとか、情報が全国的に展開したとか、そういう具体的な成果が、まだまだ出せず、それを来年度以降、具体的な形で示していけるような展開をしていきたい。

終了